

て戴くことになった。室井先生にはこのとき初めてお会いした。ご指定下さった日に、兵庫高校近くのお宅にお伺いして写させて戴いたが、今ならコピー機で、いとも簡単に複写できるのに、当時は自分で書き写すよりほかに方法がなかった。特に地図やグラフを写すのが大変だった。お部屋に簞戸やすだれがかかっていたから、多分夏であったろう。そのときのコピーは、茶色に変色し、端がボロボロになってはいるが、化石に夢中になっていた頃の記念にと大切に持っている。

古川 博二 先生

昭和22年6月11日に、戦後初めて昭和天皇が来神されたとき、神戸で採集した生物標本を見て戴くことになり、神戸市立中道小学校の古川博二先生の貝類標本と、私の白川産植物化石標本の二点が、戦災から復興したばかりの湊川・多聞小学校の二階の部屋に並べられ、古川先生がご説明役として標本の前に立たれた。陛下は軟体動物がご専門であるので、貝類については大変興味を示された由である。昭和22年発行の神戸市教育局編『教育復興状況御視察 行幸記念誌』の“天覧室に侍して 古川博二”から抜き書きをして、亡き古川先生に当日の様子を説明して戴くと、

「湊川、多聞小学校の教室は、回りの壁はもちろん、床も戦災に焼けただれ、文字通り廃墟であったのが、粗末ながらも床板を張り、代用ガラスの窓もたてられ、茶幕を張りめぐらした壁面に、児童・生徒の丹青こめた図画作品が掲げられ、純白の布で被った机の上には、私の採集した神戸産貝類標本 280種が前田氏の白川産化石 20数種とともに整然と陳列されている。……

……一種のざわめきの中に厳かな気配が伝わって、陛下は静かに天覧室へお入りになった。子供達の一生懸命に描き上げた図画を、一つ一つ御興深げにご覧下さった陛下は、やがて貝類標本の所へ玉歩をお移しになった。

田岡校長が私を紹介して下さいました。陛下はふと私の方を振り向かれ、軽くご会釈を賜った。いや夢ではない、真実そうだったのだ。私ははっとして頭を下げた。目頭が熱くなる。陛下はそれから貝に眼をお移しになり、熱心にご覧下さった。

生物学者であらせられる陛下には、これ位のコレクションは物の数にも入らぬと思われるけれども、それでも時々お立ち止まりになって、標本に息がかかるほどにまでお顔を近づけてご覧下さった。殊に陸産種のあたりでお眼に止まったものがあったのか、じっと見入り遊ばされる。あそこには神戸の代表的カタツムリやキセルガイなどがあるはずである。陛下のお眼に止まった貝の幸せを考え、わが身の光栄がつくづく思われる。他面、父に成績を見てもらおう子のような喜びがこみ上げてくる。……」（以

下略。部分的に加筆）

満面に笑みを浮かべて、この日のことをお話になる古川先生のお姿が、目に見えるようである。

その後、標本は「天覧を賜う」という肩書きがついて三越その他で公開された。古川先生の標本は、先生のキャリアからいっても、数からいっても、屈指のコレクションであったが、私は若年で、標本数も少なく、ただ集めただけの恥ずかしいもので、今思うと、他に立派な研究者がいらっしゃるのに、敗戦のどさくさとはいいながら、お粗末なものを、よくも誇らしげに出品したものだ、我ながらその厚かましさにあきれ、冷汗三斗の思いがする。

白川小学校

化石産地の神戸市立白川小学校は、たくさんの化石が保存されているのではないかと思います、親友の杉田隆三君と白川小学校を訪ねてみたが、生徒が集めたと思われる化石の一杯つまったミカン箱が、1、2個あったくらいで、全く整理されていなかった。そして教頭さんが、「食用にもならん化石の研究をしても、何の役にもたたんから、生き物の研究をするなら、イーストを増やして売ちなさい、その方が金になるし、世間の役に立つ」といわれて、ほうほうの体で学校を辞した。

このとき、私よりも若い先生が化石の説明をして下さったが、この方が渋谷龍二先生であった。

おわりに

その後まもなく、飛松中学校を退職して、再び学生生活を送ることになったが、その大学に古生物の先生がおられなかったので、この道を断念してハエを飼うことになった。

今でも白川を通るときには、あの池はどの辺りだったか、峠の家はどこにあったかななどと、昔の様子を思い出そうとするが、今の白川は、地形が一変してしまっていて、当時の風景は想像することができない。しかし、頭の中の白川峠は、5、60年前のままで、「白川」という名を聞くと、池のそばの小さな磨き砂の工場が目の前に浮かび、温顔の三木茂先生を思い出すのである。

（まえだ よねたろう：常任理事）

淡路島の思い出

富川 哲夫

私が但馬の養父中学校から淡路島の県立三原高校へ転動したのは昭和38年4月、37歳の時でした。まもなく兵庫県生物学会の総会が県立洲本高等学校で行われましたが、この年に初めて初代会長森為三博士の寄付金により

研究奨励賞ができ、その第1回受賞者は、当時但馬の関宮中学校にお勤めの西村登先生でした。その後、西村先生は水生昆虫の研究により京都大学より理学博士の学位を貰われた篤学の方であります。その翌日、洲本市の三熊山で植物観察会があり、島外からも多くの参加者があり大変盛会でした。その時の講師が室井紳先生で、先生の未だお若い頃でした。

その時の先生の表情は実に澀刺として輝くようでした。参加者からつぎつぎの質問にてきぱきと答えておられたことが懐かしく思い出されます。室井先生に初めてお目にかかったのも、この総会の時で、当時農学博士の学位をとられ大変高名な先生でした。

私が県立三原高校へ転動したのは、健康上のこともさることながら島内には至る所のため池があり、私の研究分野の淡水プランクトンの研究ができること、三原高校には生物学の大家、槌賀安平先生がおられ、直接ご指導が得られるなどが主な原因で、自分から進んで転動を希望しました。私が三原高校に在職中の5年間を通して今でも最も強く印象に残っているのは槌賀先生との出会いです。私が三原高校へ行ったときには、すでに78歳を越えておられましたが、毎日自宅から片道5kmの道を歩いて通っておられ、途中植物を採集され『一日一草』を実行しておられました。先生の教育方針は一貫して①勤めて自ら研究せよ ②精密に実験観察せよ ③正確に思考せよ の三つであり、これは自然科学を学ぶ上では最も大切な基本であります。

戦前、先生は三重県の中学校・師範学校に永くお勤めでしたが、三重県時代の教え子から有為の人材が多数出ております。戦後、先生が三原高校で教鞭をとられてから、三重県の多くの教え子たちが拠金をして、先生に研究室を送られたことは有名な話で、先生がいかに多くの教え子から敬慕されていたかを物語るものであります。先生は名利を求めず「努力し、さらに努力する人生」を自らの教えとして実行され、高い人間愛に基づいて、教育の実践と信念に生きた偉大な教育者であったと思います。

私は先生から学問のこと、教育のこと、そして人間としての生き方について多くを教えられ、先生の教育と学問に対する真摯なお姿に深く感銘し、淡水プランクトンの研究に力を注ぎ努力しました。

淡路島のため池のプランクトンを調査する間に大型のヒゲナガケンミジンコ属の仲間であつと変わった種があり、種名はシノヒゲナガケンミジンコとっておりますが、世界で未だだれも研究していない種であることが分かりました。この属の仲間は20種以上ありますが、雌の背中に突起があるのはこの種だけで雌雄の判別が容易でした。この種の日本における分布や外部形態の季節変

化と生活史などについて三原高校に在職中にほぼ明らかにすることができました。当時飼育実験や野外観察を中心にやっておりましたが、次々に新しい発見があり、とにかく研究がおもしろくてたまらない時期でした。今考えてみて、私の人生の中では最も充実した40歳代であったと思います。研究の成果は『兵庫生物』に発表させていただき、参考論文が増え、大変助かりました。

兵庫県生物学会は、先輩のおかげで地方学会では全国でも有数の学会と自負しておりますが、普通の場合、中央の専門誌にいきなり発表しようと思っても、研究内容とか研究成果、論文のまとめ方などの規定が厳しく、私の体験からよほどしっかりした論文でないとい編集委員会を通ることが困難と思います。一応地方の学会で論文のまとめ方などをしっかり勉強してから中央の専門誌に投稿されることをお勧めします。

私は、昭和43年4月に県立三木高等学校へ転動しましたが、研究は三木高校で完成し、母校の北海道大学へ学位を申請し、昭和51年2月、水産学博士の学位を得ました。50歳の時でした。私は、兵庫県生物学会へ入会して30年余になりますが、この学会へ入会してよかったことは、自分の研究分野での情報はもちろんですが、その他の情報交換が容易であったことと、もう一つは多くの会員の方々との交流ができたことであり、そして、その交流の絆は結構強かったと思います。

兵庫県生物学会が、創立50周年を迎えようとしております。これを契機として会員の方々が一致協力して当学会が益々発展することを心から念願いたしております。

終わりにになりましたが、この度任期満了(4年間)となり、新会長平畑政幸氏と交替することになりました。会長在任中は役員はもとより会員の方々のご協力とご支援により無事任期を果たすことができました。心から厚く御礼を申し上げます。(とみかわ てつお:顧問)

『兵庫生物』と50年

高橋 壽郎

1947年、明石で兵庫農大の森為三氏を会長に兵庫県生物学会が発足した。その年の10月1日、わたしはロシア・カザック共和国ウスチカーメンゴルフスクから、まる2年間のいわゆるシベリア抑留生活を終え、ナホトカから函館経由舞鶴に帰国した。兵庫県生物学会へは、恩師室井紳先生(県立第二神戸中学校で3年間、博物を教えていただく)にお願いして入会した。

機関誌『兵庫生物』の創刊号が出版されたのは1948年3月である。わたしの報文が初めて『兵庫生物』誌上に発表できたのは Vol. 1, No. 5 (P. 95, 1951)であった。その時、『兵庫生物』は今後大いに発展する会誌で